

シンポジウム

< テーマ > 子どもが主体となる学校づくり

実践報告 宮坂昌一 (茅野市わかば保育園)

実践報告 松倉紗野香 (上尾市立東中学校)

実践報告 三浦信宏 (ブノンペン日本人学校)

指定討論 佐藤真 (関西学院大学)

指定討論 加納誠司 (愛知教育大学)



コーディネーター
佐野亮子
(東京学芸大学)

シンポジウムの趣旨

平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領には、これまでにはなかった前文が掲げられている。そこには学校の役割について明確に記された以下の一文がある。「これからの学校には、(中略) 一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」

各学校において、いかにして計画的に教育課程を組み立て、目指す教育の具現化をはかるのか。そのために自律的で創造的な学校づくりはますます期待されるであろう。

昨年の本学会全国大会のシンポジウムでは、子どもの視点に立つ授業を創るために求められるカリキュラム・マネジメントについて、理論と実践の両面で様々な議論が展開された。その内容を象徴的な言葉でまとめてみると、到来しつつある「正解のない時代」を生き抜くため「混沌に耐え泥沼の中で大事なことを見出す力」を育てるには、経済原理に基づく従来型のマネジメントから脱却し、教育の原理(人間的、平和的、民主主義的等)に基づいた子どもの視点に立つ授業、単元、カリキュラムの創造を目指すことが方向として明らかになったが、その実現は、考え続け実践し続ける現場の力にかかっていると感じられた。そしてこの問題解決の手掛かりとなるのは、シンポジストの実践報告や会場から寄せられた様々な声であった。すなわち、慣習や教師文化や常識に捕らわれず、本気で「やりたいこと」を実践し、その中で子どもが変わり、教師や学校が変わっていった様々なエピソードに、解決の糸口や鍵が内在していたように思う。

このような経緯をふまえて本シンポジウムでは、次期学習指導要領が掲げる「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」などを射程に入れながらも、あえて「子どもが主体となる学校づくり」という大きなタイトルをもうけた。個性化教育の基盤である子どもへの信頼と教師の創造性は、どのような実践を通して学校を変える原動力として作用しているのか。1つの実践に至る過程にはどのような要因が絡んでいるのか、あるいは意図的にどのように周囲を巻き込んできたのか。このシンポジウムでは、子ども主体の学校づくりに日々奮闘する登壇者たちの生々しい実践報告とそれを多角的・多面的に分析し意味づけ価値づける指定討論者の議論を聞きながら、参加者一人ひとりが自らの経験と重ねてふり返り、考えることで、学校づくりの豊かな可能性と子どもが主体となる授業の創造を探っていく機会となることを期待したい。

* 三浦先生は、当初インターネット参加の予定でしたが、このシンポのために一時帰国して下さいました。